

陳舜臣さんを語る会通信

NO.34

Apr. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年4月10日

作家になる前から構想、『紙の道（ペーパーロード）』

初出紙は「読売新聞」1993年5月12日～1994年6月29日毎水曜日夕刊。初刊本は『紙の道（ペーパーロード）』1994年10月 読売新聞社（下枠内に表紙画像）。ここで使用したのは集英社文庫版。（編集委員 橘雄三）

集英社『陳舜臣中国ライブラリー23』
「自作の周辺」対談
「交流と衝突の中に育まれる文化」
文中、傍線は編集委員加筆

稲畑耕一郎 『紙の道（ペーパーロード）』

これはすばらしい本ですよ。紙というものを通して、これだけユーラシア全体にわたって東西の文化交流のことが書かれた著作というものは、他にないでしょう。「ペーパーロード」というのは、シルクロードに対しての陳さんの造語でしょうか？

陳舜臣 ええ、それに対してというのはなく、ペーパーロードというのもあり得るんじゃないかと思いついてね。シルクは商売そのものですが、ペーパーは、思想とか文物、芸術を伝えるものですから、もっと声高にアピールしなければ、という思いもありました。私は題名を決めるとき、人に任せることが多いんですけど、これは最初から『紙の道』と決めていました。

稲畑 陳さんは、いわゆるシルクロードについての著作がいろいろありますが、この『紙の道』がいちばん……。

陳 やはり、集大成という意味もありましてね。愛着があります。

稲畑 ずいぶん前から、紙による東西文化の交流を書こうとされておられたようですが。

陳 作家になる前からでした。高仙芝の業績にうたれましたね。それで、そのころから考えていたんです。高仙芝は高麗出身の唐の將軍ですが、数々の武勲をたてながら、最後は反逆罪で殺されてしまふ。彼の負け戦はイスラム軍との「タラスの戦い」においてのみでしょう。しかし、彼が負けたおかげで紙が西方に伝わる。唐軍の捕虜のなかに紙漉き職人がいたんです。他の説もありますが、いちおうそれが定説なんです。

それはそれとして、ロブノール紙など前漢時代の原始的なものは別ですが、二世紀初頭に後漢の宦官蔡倫が発明したとされる現代に通ずる紙は、長い間国家機密でした。それが、天寶十載（七五一年）の「タラスの戦い」を機に、西漸していく。よくぞ負けてくれた、と高仙芝を顕彰したい気持ちがあったんです。スタインは彼を顕彰すべきだといっています。こういう人物がいたことを世界中が忘れていた。タラスの戦場やパミールのダルヨット峠に高仙芝の銅像を建てるべきだとね。

そんなこともあって、処刑された彼の



1993-94 『紙の道』取材のため中央アジアを訪れた陳さん
2015.1.22 読売新聞より転載

鎮魂の意も含めて、紙が伝わった歴史の裏には、こういう物語があると……。 （中略）
陳 歴史のなかでの人間の物語ですね。高仙芝自身は、自分が果たした役割なんか知らない。でも、本人とはかわりなく紙が伝わっていく。独り歩きして、長い歳月をかけて世界中に広まっていくんですね。一つのロマンです。

（中略）

稲畑 陳さんの作品を読んでいて感じるのは、陳さんが、人は動き、それとともに物が動き、またものの考え方も伝わるということ、信念のようには持つておられることです。『紙の道』などは、それを具体的に示した作品ですね。

（中略）

陳 紙がどこで誕生したかではなく、交流を通して文明が豊かになっていくことを言いたかったんです。これは、すべての国の人にとつての宝なんです。



玄奘三蔵(げんじょう さんぞう)についてのいくつかの補足

中国から仏教を求めてインドへ行った僧として、桑原隲藏^{じつぞう}『入竺求法の僧侶』は、東晋の法顕、後秦の智猛、劉宋の法勇、後魏の恵生、唐の玄奘(602-664)、義浄、悟空、宋の繼業の八人を挙げていますが、玄奘が際だって有名です。

ここでは、『紙の道』でも多く取りあげられている玄奘についてみていきます。下記文中、傍線は編集委員が加筆。

「シルクロードを通じて最もみごとに
伝来したもの」は仏教

陳舜臣さんは、集英社文庫版『紙の道』
「あとがき」で、

西方の人にとっては、原材料不明の奇跡の
織物シルクは、ロマンに満ちたもので、それ
が通った道——シルクロード——と名づける
のは絶妙のネーミングであろう。(中略)

だが、この道を通った最も重要なものは、
シルクのような形のあるものではなく、人間
の内奥にかかわるもの、思想あるいは信仰と
呼ばれるものかもしれない。ここは思想の道、
あるいは信仰の道でもあった。最もみごとに
伝来したものを挙げるとすれば、仏教という
ことになるだろう。

と、おっしゃっています。
そして、『紙の道』には、玄奘三蔵につい
て多くの記述があります。

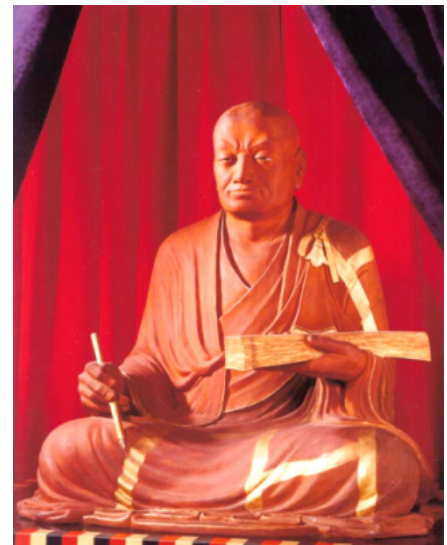
奈良薬師寺玄奘三蔵院の

玄奘三蔵像について

以下、引用文に付記した頁は文庫版による

奈良薬師寺に、玄奘三蔵院が建立されたの
は、平成三年のことである。そこに玄奘三蔵
像が安置されていて、私は落慶のときから、
なんども拝観している。

玄奘さんが左手に持っているのは、あきら
かに梵篋^{ぼんけつ}、すなわち貝多羅であり、右手に筆
をとっておられる。これは天竺留学中のすが



薬師寺HPより

たでなければならぬ。唐に帰ったあとなら、
貝多羅を読むが、書くのは紙にむかってのは
ずなのだ。

天竺にむかう苦難の旅で、玄奘三蔵はとう
ぜん信仰の拠りどころとなるお経をたずさえ
ていたにちがいない。漢訳のお経は紙に
され、巻物になっていたのはいうまでもない。
だが、筆写のために白紙はどれほど用意して
いたのだろうか？(31頁)

東京国立博物館所蔵

「玄奘三蔵像」について

それから、ここで、もう一
つ、玄奘三蔵の有名な絵につ
いてふれます。

朱の軸木の経巻がびっしり
と詰め込まれた笈^{おび}を背に、首
には髑髏^{どくろ}の胸飾りを付け、脚
絆、草履姿の旅行く僧の姿を
描いています。



左の画像は、sekainorekisi.com より

これは、東京国立博物館所蔵、重要文化財
「玄奘三蔵像」です。鎌倉時代の作ですが、
作者不詳です。

玄奘が天竺からもたらした經典や仏像は膨
大でした。『紙の道』に、

經典は五百二十夾、六百五十七部であつた。
「夾」とは、はさむという意味で、貝葉^{ばいよう}の束
を意味する。(175頁)
と、あります。

また、帰路、

パミール越えのとき、群盗に襲われ、經典
の一部をのせた忠実な象が、逃げまどつて河
におち、溺れ死んだのである。(173頁)
との記述もあります。

『紙の道』ではありませんが、馬22頭で運
んだとの記述があります。従者を含めても、
数人が背負って運べるような量ではなかった
のです。

ところで、左の画像、背負っている経巻は
どれも紙の巻物にみえます。これは、インド
遍歴中、帰路、いつの姿でしょうか？

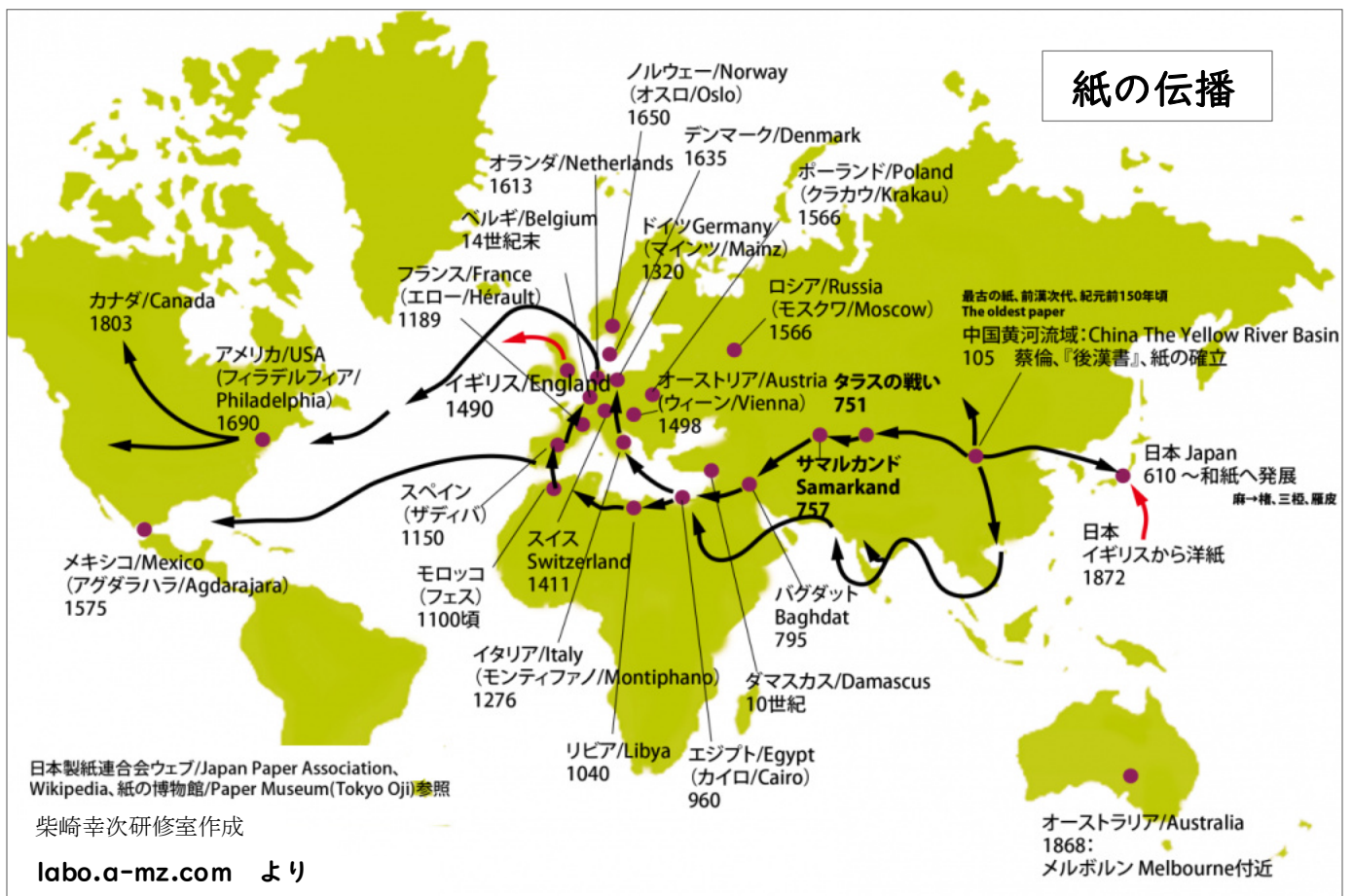
二つの地図「玄奘三蔵の旅」と「紙の伝播」

先ず、「玄奘三蔵の旅」です。往復とも陸路ですが、往路では、タラス、タシケント、サマルカンドなどにも寄っており、タラス城の近くの小さなまちに中国人の集落のあったことは『大唐西域記』にふれられています。



タラスの南に、三百余戸の中国人まちが、長いあいだ存在していた事実は、タラスの戦いの百二十余年前に玄奘が報告している。（『紙の道』文庫本108頁）

中国伝来の製紙技術が、アフリカの地中海沿岸地方を経て、12世紀半ば、スペインに侵入したムーア人(北西アフリカ地方のイスラム教徒)によってバレンシア地方(スペイン東岸 海港都市もある)に伝えられ、ザディバ(ハティバ シャティバとも表記される)に製紙工場が建設された。これが、ヨーロッパにおける製紙工場の始まりとされる。



膨大な古文書が発見された敦煌第十七窟

第十六窟及び第十七窟の様子

文中、傍線は編集委員加筆

敦煌の石窟の一つに住み着いた道士、王えんりよく円籙によって、一小窟（現在の第17窟）から45万点にのぼる古文書や画卷が発見され、世界的に敦煌学が起るきっかけとなりました。■王円籙の読みは、おうえんろくとも。『紙の道』の記述から、第16窟及び第17窟の様子をみてみます。

発見の時期については、王道士自身が一八九九年五月といってみたり一九〇〇年六月といってみたり、はつきりわからない。（中略）

王道士が住みこんだ第十六窟は、かなり広い窟であった。そして、問題の第十七窟は、じつは第十六窟の「耳房」といって、控えの部屋であったようだ。ふつうの耳房は開放されているものだが、第十七窟は入り口に壁を塗ってふさぎ、しかも壁画を描きこんでいたので、誰もそのうしろに部屋があるとはおもわなかった。塗りこめた壁が老朽化して、ひびがはいり、煙が吸いこまれるという奇現象をおこしたので、発見のいど口になったのである。どうやら王道士はアヘンを吸っていたらしい。

(文庫本 158頁)

陳舜臣さんは、第17窟はこの石窟寺の創始者洪ベンフンベンの部屋、つまり開山堂で、もとはここに洪ベン



の像がおかれていたと記しておられます。

この開山堂のなかの壁画は二本の樹木がえがかれ、そのあいだがかなり広い空白になっていた。樹下には供養人というよりは侍者らしい人物が、それぞれえがかれている。

一九七五年に私が最初に見たときは、このような状態であったが、九年後の一九八四年に再訪したときは、空白のところに、僧洪ベンの像が置かれていた。その像は、どこかほかの窟にころがっていたようだ。やっと近年になって、洪ベン像だと判明し、千年ぶりにあるべき所に戻ったのである。（中略）

千年ほど前に、なにかの事情で、開山の像をはこび出し、この窟に古文書の山をおしこんだのである。像をもち出したのは、すこしでも多くの文書をいれるためであったとおもわれる。（文庫本 165-166頁）

第17窟密封の経緯、及び発見された膨大な古文書がその後どうなったかについては『紙の道』に詳述されています。

なお、上の画像は、陳舜臣さんが二度目、第17窟を訪問されたときの状態です。最初の時、中央の洪ベン像はなかったのです。

紙の道、ユーラシア大陸の終着駅 イベリア半島

『紙の道』の最後の章から引用します。

ヨーロッパで、はじめて紙がつくられたのは、十二世紀初頭であった。後漢の蔡倫の製紙技法開発に遅れること千年以上ということになる。

場所はイベリア半島の南部であったといわれている。その地域は、長いあいだイスラムの支配下にあったのだ。ヨーロッパの紙は、はじめはイスラム圏から供給され、ついでイスラム勢力の進出によって製造が開始されたのである。（文庫本 286頁）

後ウマイヤ朝支配下のコルドバでは、大学が創建され、大図書館が建設され、世界各地から学者や学生が集まった。当然、紙の需要は高く、陳さんも「これでは、製紙技法が伝わらないほうがふしぎであろう」と記述されています。ルネサンスもイベリア半島のイスラム文化を抜きにしては語れません。

ところで、『桃源郷』の「コルドバまで」と次の「異邦人の丘」に、実業家ハーシムが、コルドバで、ヨーロッパ初めての紙工房をつくるくだりが描かれています。

作家には、取り出して使いたくなる自家薬籠中の物があるのでしょう。陳さんにとって、コルドバでの製紙というのはそんな一つであるようにおもえます。

